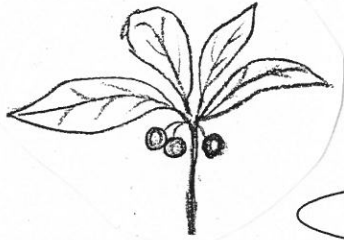


*ヤブコウジ



<> はおもな地点をあらわしています

季節のできごと ・水田の稲、「彩のかがやき」が稲刈り→乾燥(はざ掛け)→脱穀の手順をへて、玄米の状態となりました。
 このあと、精米すると、白米として食べることができます。
 エコロッジ前で地中熱エネルギーの実証設備の設置工事が行われています。 <A>

ヤブコウジ [十両] (赤)

アオキ(赤)、サカキ(黒)、エゴノキ(緑)



ツグミ

*モズ



ネズミモチ (紫)



*クチナシの美

出入口

* 印は、裏に説明があります。

よ さんこう くだ
読んで参考にしてみてください。

展望室

ノイバラ(赤)、ピラカンサ(赤)

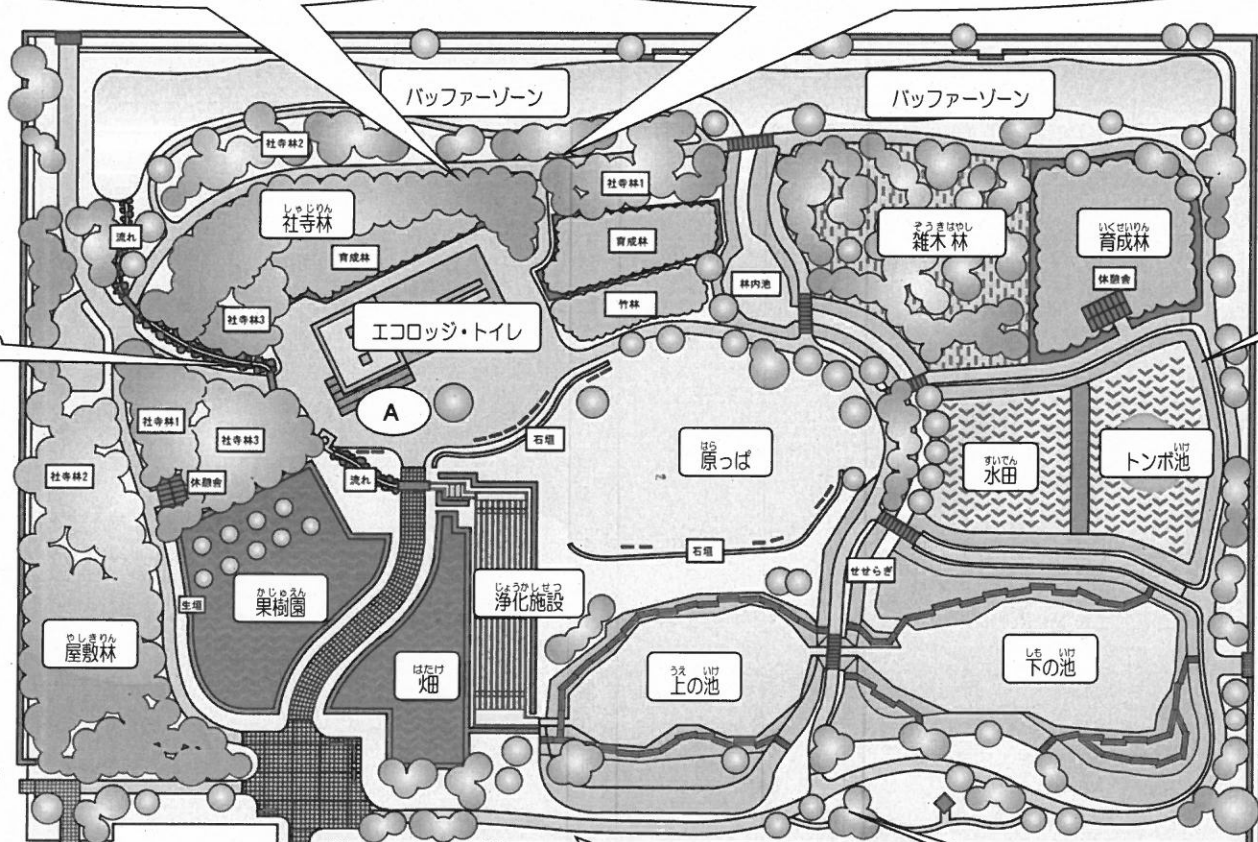
エノキ(黒)

モチノキ(赤)

ハンノキ



*ハンノキ



赤い実

冬は赤く熟す実が多いです。生態園ではお正月飾りに使われるヤブコウジ（ジュウリョウ）の他、ノイバラ、ピラカンサ、アオキなどが見られます。冬の赤い実は視覚の鋭い鳥に見つけてもらうためといわれています。鳥は嗅覚が鈍いのであまり香りはせず、鳥が食べやすいよう小粒で丸い形が多いようです。わたしたちの目には黒く見える実のなかには、紫外線領域も見える鳥には色づいて見えているものもあります。

鳥に食べられたあと、種はフンと共に排泄され、そこで芽を出します。フンは種の生長のための肥料にもなります。



モズ

モズはムクドリくらいの大さで、埼玉県内でも農村部などでは普通に見られます。枝や杭などの見はり所にとまり、尾をゆっくり回しながら、昆虫や蛙などを捕獲します。ときに獲物を小枝などに刺す「はやにえ」を行います。生態園のカラタチの枝でも、冬の間、時折見られます。

いろいろな鳥の鳴き真似をすることから「百舌（もなまえ）」の名前があります。

ヒヨドリ



赤い実が大好きな鳥はヒヨドリ、ムクドリ、オナガツグミなどです。

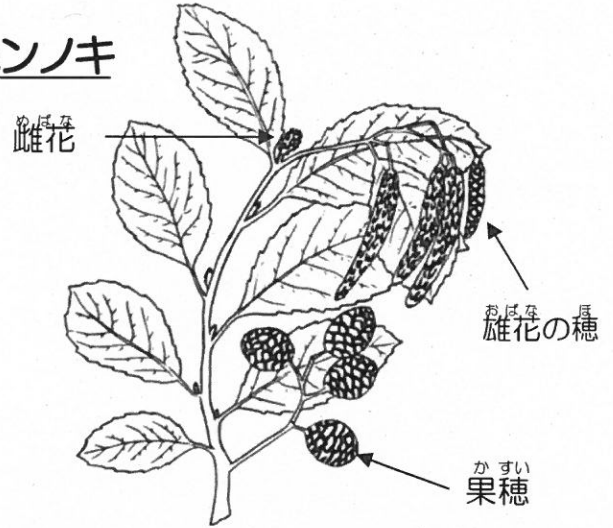
ヒヨドリは「ピーヨ、ピーヨ」と甲高く鋭い声で一日中鳴き合っています。体は、スズメよりずっと大きく、灰褐色で、尾が長めのスマートな体つきです。寝ぐせがついたようなボサボサ頭も特徴ですが、何と言っても一番の特徴は、鳴き声です。かつては、夏は山地で冬は平地で過ごす漂鳥でしたが、近頃は一年中見かけるようになってきました。地上に降りることは少なく、羽ばたきと滑空を交互にくり返す波型の特徴ある飛び方で、木から木へと、鳴きながら飛んで行く姿を近くで見ることがあります。

クチナシの実



おせち料理に欠かせない葉きんとんを、きれいな黄色に仕上げるための染料として使われるのが、クチナシの実です。クチナシは、6月から7月頃に濃厚な香りを放つ白い花を付け、その後、少し変わった形の実を付けます。実は11月頃から12月にオレンジ色に熟しますが、熟しても裂けたりはしません。そこから「口が裂けない」という意味で、クチナシという名が付けられたようです。

ハンノキ



生態園には、ハンノキがたくさん植えられています。これは、埼玉県の蝶であるミドリシジミをよむためです。ミドリシジミの幼虫はハンノキの葉を食べて成長します。ハンノキは、水気の多い場所を好み、関東地方では田んぼの境を示す目印や収穫後のイネを干すはざ掛け用として植えられていました。水田や沼地が減り、ハンノキも減り、ミドリシジミの数も少なくなりました。

ハンノキは、ちょうどこの寒い冬の間、花を咲かせます。だらりとさがった雄花の花粉が雌花に運ばれます。するとつぎとしあき、次の年の秋に小さい松ぼっくりのような実（果穂）ができ、種を落とします。



生態園マップ

** 2018冬編 **